

山口日独協会ニュース

Neuigkeiten der Japanisch-Deutschen
Gesellschaft Yamaguchi

Nr. 133, Januar, 2018

山口日独協会 〒753-0083 山口市後河原94
Japanisch-Deutsche Gesellschaft Yamaguchi:
Ushirogawara 94, Yamaguchi, 7530083, JAPAN
TEL/FAX : 083-920-2965

<http://www.jdg-yamaguchi.jp/> メール: info@jdg-yamaguchi.jp

協会からのお知らせ

1 2018年度総会のご案内

第26回定例総会を下記のとおり開催いたします。

*日 時 2018年2月11日(日) 15時00分～18時00分

*会 場 湯田温泉ユウベルホテル松政2階芙蓉の間
(山口市湯田温泉3丁目5-8/TEL083-922-2000)

会場は、今年も湯田温泉のホテルで行います。

JR湯田温泉駅から徒歩15分。バスの場合は、湯田温泉バス停で下車し、徒歩1分。

また、温泉に入りたい方は、無料で千人湯に入れます。温泉付き、ワイン付き等々の総会をお楽しみください。

*総 会 平成29年度事業・決算報告

平成30年度事業計画・予算協議

その他

*記念行事 講演：藤川哲氏「ケルン、ヴァルラフ＝リヒャルト美術館の見どころ」

*懇親会 16時00分～18時00分 ワイン・パーティ

*会 費 3,000円(懇親会のみ)

総会並びに懇親会の出欠は、同封のハガキで2月6日までにお知らせ下さい。

総会ご欠席の場合は、ハガキの委任状に御記入の上、必ず投函いただきますようお願いいたします。(総会の成立には会員の皆さんの過半数の出席又は委任状が必要です)

返信ハガキには、通信欄がありますので、会員の方の近況、協会への御意見等何なりと御記入をお願いします。皆さんからの近況報告等という事で、会報にも掲載させていただきます。

総会の状況、結果は、次回の会報でお知らせいたします。

2 行事のご報告

(1) ポスター展「我ここに立つ～マルティン・ルター、宗教改革とそれがもたらしたもの」

11月2日～12日、山口県立山口図書館ロビーにて行いました。

500年前、ルターが、ヴィッテンベルクの城内教会の扉に「95箇条の論題」を掲示し、これが宗教改革の始まりと位置付けられ、ヨーロッパを変えました。ドイツ大使館提供のパネルを展示しました。

ちょうど山口県に来られた大阪・神戸ドイツ連邦共和国ヴェルナー・ケーラー総領事にも見学して頂きました。図書館でドイツ大使館提供のパネルが展示されている様子を嬉しそうに見ておられました。その様子は次ページに掲載しています。

(2) 「リディア・ミシュクルニック氏自作朗読会」

11月2日（木）、菜香亭にて行いました。朗読会は、4年ぶりの開催でした。



(3) 「無伴奏ヴァイオリンソナタ演奏会」

11月18日、山口県旧議会棟議場にて、ヴァイオリンは瀬川祥子さん、バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータの素晴らしい演奏でした。ヴァイオリンは、イタリアの名器で素晴らしい響き、貴重な体験を楽しんで頂きました。



(4) 大阪・神戸ドイツ連邦共和国ヴェルナー・ケーラー総領事との交流

高校生へのEU関連の講演、山口県副知事表敬訪問、山口大学意見交換等の行事で来県されました。急きょ理事の皆さんとの交流会も開かせていただきました。



(5) クリスマス会 (Weihnachtsfest)

12月9日、山口市大殿地域交流センターにて開催しました。ウィンナーソーセージ造りも楽しみました。



3 会員の皆さんからの投稿、情報提供

藤川哲さんからの「グランド・ツアーのハイライトドイツ編」投稿です。次ページ以下に掲載しています。なお、藤川さんには、総会でも講演をしていただきます。

ニューズレター第129号に掲載された「グランド・ツアーへの誘い」。私の署名になっていますが、正しくは妻の瑞穂が書いた文章です。この場を借りて訂正します。

グランド・ツアーは、3つの現代美術展——ヴェネツィア・ビエンナーレ、ドクメンタ、ミュンスター彫刻プロジェクト——と、バーゼルのアート・フェアを周遊する大旅行を指します。この旅行記では、昨年8月に三女と一緒に周ったドイツのカッセルで開催されたドクメンタとミュンスター彫刻プロジェクトのハイライトをご紹介します。

ドクメンタは、戦後10年経った1955年、ナチス時代に迫害された前衛芸術を紹介する目的で始まり、その後ほぼ5年おきに開催されて2017年が第14回目。これまでも同時代の社会情勢を反映した作品選定が注目されてきました。総監督アダム・シムジックはポーランド人で、2012年に発見されたコルネリウス・グルリット（ナチス時代に美術館やユダヤ人から押収した前衛作品を売りさばいた美術商）の秘蔵コレクションの全点公開を企画しましたが、ベルンの美術館から貸出しを拒否されて断念。その方向性を継承した形で、ドイツ人アーティストのマリア・アイヒホルンが、公立図書館等に収められていた旧ユダヤ人蔵の押収本を持ち主に返却するプロジェクトを《ローズ・ヴァラン研究所》と名付けて、展示しました（図1）。ローズ・ヴァラン（1898-1980）は、ナチス占領下のパリでレジスタンス運動を展開した女性美術史家で、ドイツ軍による美術品接収を阻止したことで、戦後、フランスから勲章を授与されています。また、その隣の展示室に



図1 ローズ・ヴァラン研究所



図2 リアル・ナチス

はポーランド人アーティストのピョートル・ウクランスキが、バツ印を書いたヒトラーの肖像の周りに、顔写真、似顔絵含めて203名分を並べた《リアル・ナチス》を壁面一杯に展示（図2）。歴史的知識と化したナチス・ドイツを一人一人の具体的な個人の集合として再提示することにより、今を生きる私たち自身が、どのようにこの歴史的事実に向き合うかを問うていました。私はこうした企画を実現させたこと自体にドクメンタのメッセージを読み取ります。

日本の現代美術展で、韓国人やベトナム人を総監督に据えて、日韓併合や大東亜共栄圏を反省する企画を実現させることは可能でしょうか。他者の視点を借りて、自らに向けられる批判に真摯に向き合う労をとっているかどうか、個人としても学べる姿勢だと思えます。

また、野外展示のため、観覧料を払わずとも誰もが鑑賞することができた作品が、アルゼンチンのマルタ・ミヌヒンによる《本のパルテノン神殿》です（図3）。ドクメンタ14は、「アテネに学ぶ」をテーマとしており、カッセル（6/10～9/17）に先行してアテネ（4/8～7/16）でも開催されました。カッセル会場のフリデリシアヌム美術館の隣に出現したパ

ルテノン神殿は、躍進を続けるドイツと、債務超過に陥っているギリシアをめぐる議論を促した今回のドクメンタを象徴する作品だったと言えます。ビニールに包まれて建物の柱や破風を構成した本の中には、ハリー・ポッターシリーズやカフカの小説などの有名な本が多数見られましたが、いずれも世界のどこかの国で「発禁」とされた本でした。もともと《本のパルテノン神殿》はブエノスアイレスで1983年に発表されたプロジェクトで、当時は、軍政権下のアルゼンチンで流通できなかった本25,000冊で公共空間に展示するプロジェクトでした。民主主義の象徴であるアテナ神殿によって、世界規模の思想統制事情を可視化した作品で、裏を返せば、私たちには知る権利があり、その知識を基に考える義務ある、「アテネに学べ」というメッセージに繋がっているのではないのでしょうか。



図3 本のパルテノン神殿

カッセルは、グリム兄弟の末弟ヴィルヘルム・グリムが生前活躍した縁でグリム兄弟博物館があり、また丘の中腹に建つヴィルヘルムスヘーエ城やその山頂にそびえるヘラクレス像を祭った城塞が観光名所です。フランクフルトから電車で約1時間40分。ドイツのほぼ中央に位置している地政学的な要所であり、1999年から「ドクメンタ・シュタット」というニックネームを公式に採用していることから、この現代美術展ドクメンタとともに、これからますます注目を集める都市に発展していくと思われま



図4 刺々しい引用、刺々しい田園詩

ミュンスターまでは、カッセルから電車で3時間弱。北西に約150km離れています。戦後、空爆で破壊された街並みの復興に際し、ミュンスターは、他の多くのドイツの都市と同様、戦前の景観の復元に努めたため、中心部の商業地区には中世風の街並みが見られます(対照的に、カッセルは近代建築による復興を推進しました)。30年戦争を終結させたヴェストファーレン条約が1648年に締結された歴史的由緒のある街です。

ドクメンタ14では、140人・組以上のアーティストが参加した中、日本人アーティストが1人も選ばれていなかったのに対し、ミュンスター彫刻プロジェクトでは、34人・組のごく限られた人数の中に2人の日本人作家が含まれていました。荒川医(えい)さんの《刺々しい引用、刺々しい田園詩、刺々しいミュンスター》(図4)は、クールベや田中敦子らを作とする既存の絵画作品7点をLED電球で模造し、草原に点在させていました。それぞれのLED絵画にはスピーカーが付属しており、詩的な文章が読み上げられます。もう1人の日本人作家、田中功起さんは、ミュンスターの市民8人に参加してもらって9日間行ったワークショップの記録映像を展示していました(図5)。《暫定的習作:ワークショップ



図5 暫定的習作:ワークショップ#7

プ#7 いかにして共に生き、未知のものを共有するか》という長いタイトルから「共生」という、明解なテーマが読み取られます。ワークショップの映像は、会期が終了した現在もネット上に公開されており、<https://vimeopro.com/kktnk/ps7>で見ることができます。

ミュンスター彫刻プロジェクトが始まった1977年、ミュンスターはかなり保守的な街だったと言われています。名の知られた彫刻家の作品や、前衛的な彫刻作品の設置が拒否される事が続いて、市民に彫刻の歴史と最新動向を知ってもらうために3部門からなる彫刻展が企画され、その10年後に、最新動向の紹介部門が継承されて、97年、2007年、と10年毎に開催されるようになりました。ミュンスターは自転車道が整備された街で、市内各所に設置された野外彫刻をレンタルサイクルに乗って見て回ります。荒川さんの作品を探して地図を広げていたところ、年配の男性が「行先が同じ方向だから」と先導してくださり、作品の場所にたどり着いた際にも「この作品が今回一番話題になっているよ」と、誇らしげに語ってくれました。40年かけて根付いた前衛的な彫刻を街なかに設置するプロジェクトは、市当局から10年おきでなくもっと短い周期で開催したいという声も出ているそうです。

私にとってミュンスター彫刻プロジェクトは、1回目の77年から企画者として携わっているカスパー・ケーニッヒとの縁で特別の思い出があります。かつての勤務先である群馬県立近代美術館が、1998年にケーニッヒの企画による現代美術展を開催することになっており、その予備調査の意味もあって97年の彫刻プロジェクトを見に行きました。その後、2007年にも見に行き、今回は3回目です。かつての新作が街の風景に溶け込んでいる様子や、彫刻の周りの景色が変貌している様子を、10年、20年の時を経て眺める体験には、5年おきに訪れるカッセルや隔年で再訪するヴェネツィアとは、相当に異なる感慨があります。未来に思いを巡らせれば、次回の2027年には、1943年生まれのケーニッヒが84歳を迎え、私自身も還暦前の「いい歳」になっています。10年という尺度を持てる



図6 見上げて、言葉を読んで…

こと自体が貴重な精神的糧であると思います。97年に発表されたイリヤ・カバコフの《見上げて、言葉を読んで…》(図6)は、07年も今回も見に行きました。ロシア出身のカバコフは、ソ連崩壊後の1993年のヴェネツィア・ビエンナーレでロシア館の代表作家として展示を行い、当時、新しい時代を予感させる作家の1人でした。

カッセルに5泊、ミュンスターに3泊の長旅でしたが、駆け足でさっと見ただけの作品も随分あります。それらも含めて、これから5年、10年の歳月をかけて図録の解説を読みながら、鑑賞体験を反芻し、じっくり向き合っていきたいと考えています。

お問合せは、各理事か上原理事長へご連絡をお願いします。メールでも結構です
上原理事長 (TEL・FAX:083-920-2965,携帯:090-5269-4941・メール:info@jdg-yamaguchi.jp)
